

## 最優秀賞

テーマ…医療と福祉、わたしの体験  
「自宅での看取りを経験して」

福島県立橋高等学校2年 柴田裕唯

二年前の冬、家族全員が見守るなか、九十四歳の曾祖母は息を引き取りました。

私は、曾祖母のことを「ばっばちゃん」と呼び、とても慕っていました。ばっばちゃんは高齢でしたが、とても元気で畑仕事を生きがいにしていました。

そんなばっばちゃんが胃の不調を訴え、検査すると胃がんで余命半年と診断されました。その診断結果に家族みんなが驚きましたが、一方でまだ元気そうな目の前のばっばちゃんの姿から、治る見込みがないのに入院生活を送らせることはかわいそうだと考え、介護保険を申請して自宅で療養することになりました。

当初、とても元気でしたが、日に日に食事の量が少なくなり、水も受け付けなくなっていました。さらに薬の影響で、実際には見えないう人が見えるようで、大声を出すようになりました。

当時、私は中学生だったので、両親がこのまま自宅で介護を続けていくことに強く不安を抱いていたことを知りませんでした。そして実際は、ばっばちゃんの「家がいい」という気持ちを尊重し、自宅介護を継続することになったのです。

ばっばちゃんは日を追うごとに元気がなくなり、介護開始から二か月後には、一切の食事を受け付けなくなりました。

それからほどなくして、穏やかな冬のある日、ばっばちゃんは眠るように息を引き取りました。

六十年ほど前まで、自宅での看取りは当たり前でした。しかし、医学の進歩と核家族化により、現在では約八割の方が病院で亡くなっています。そんななか、私は四世代同居の八人家族という環境に育ち、身近な曾祖母が亡くなる瞬間に家族全員で立ち会ったことができませんでした。

日常生活の場で医療を受けることで、ばっばちゃんは最後まで自分らしく生きることができたのではないかと思います。

特に、家族が好きな時間に顔を見たり話したりできたことが病院と一番の違いでした。

住み慣れた自宅で家族と一緒に穏やかな最期を迎えたことを、親戚が口を揃えて「ばっばちゃんは幸せ者だ」と言っていたことがとても印象に残っています。

看取った後、訪問看護師さんは私に「一緒に死後の処置をしませんか」と声をかけてくださいました。いくらばっばちゃんとはいえ、亡くなった人に触れることは初めてだったので、最初は抵抗がありました。しかし、実際にやってみると、体はまだ少し温かく、がんと闘いはつらかっただろうなあという気持ちがこみ上げ、それが自然と「お疲れ様」という言葉になっていました。

さらに訪問看護師さんとの会話のなかで、ばっばちゃんは普段農業をすることが趣味で、オシャレをしているのを見たことがないことに気がつきました。そこで、最後までいいはオシャレをして綺麗になってほしいと家族で話し合い、生前大事にしていた訪問着を着せてあげ、マスカラやアイシャドーなどのお化粧もしてあげました。処置が済んだばっばちゃんは、とても穏やかな顔で少し笑っているように見えました。

ばっばちゃんの看取りの体験から、自宅で看取ることには大きな意義があることを実感しました。そしてこのことが私にとって在宅医療に興味を持ち、保健師になりたいと思うきっかけになりました。

病院に入院している高齢者の多くは「早く家に帰りたい」とよく言うそうです。これは誰もが我が家が一番安心できる最高の場所と考えるいるからだと思います。

私は将来、自宅に帰りたいという人に、より良い最期を迎えてもらうために、地域医療に携わりさまざまなサポートをしたいと考えています。そして、高齢者の皆さんの最後の望みを少しでも叶えてあげられるような保健師になりたいと思います。